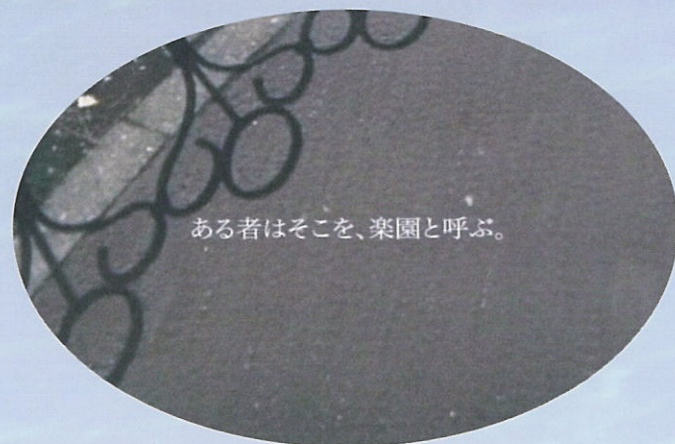


Si-report

Socio-Intelligence report

専修大学のビジョンと現状

Vol.3
2008



ある者はそこを、楽園と呼ぶ。

Some call it paradise.



ある者はそこを、分かれ道と呼ぶ。

Some call it a fork in the road.



また、ある者は
停車駅のひとつに過ぎないと言う。

Yet some say it's but only a station on life's railway.



ある者はそこを、混沌と呼ぶ。

Some call it chaos.



ある者は小宇宙であると言い、

Some may say it's a small Universe.

Today University is ...

ある者はそこを、楽園と呼ぶ。

ある者はそこを、混沌と呼ぶ。

ある者はそこを、分かれ道と呼ぶ。

ある者は小宇宙であると言い、

また、ある者は

停車駅のひとつに過ぎないと言う。

今日、大学とは。

*Senshu University
Since 1880*

「大学力」を示し 130年の歴史と伝統に恥じない 活力ある大学への道を歩む

学校法人 専修大学理事長 日高 義博
専修大学長 法学博士

本格的な大学全入時代の到来により、大学間の競争はますます激しくなっています。創立130年を目前にした今、現状を見据えた機動力のある改革に邁進し、二極化の分水嶺からの大きな飛躍を遂げなければなりません。

第1に重要なのは、学生の質を保証しうる教育を行うことです。本学で学生を受け入れた以上は、自信を持って社会に送り出せる人材を育成しなければなりません。本学の21世紀ビジョン「社会知性の開発」は、学生時代に培われた知力と人間力をもとに、卒業生が社会に貢献し活躍することなくしては実現しえないものです。大学は人間教育の場であり、学生と教職員との人間的な絆が重要です。そして、教育の現場では学問的な感動と共感がなくてはなりません。今後も「学生を

基本にすえた大学づくり」を諸策の骨格に改革を進めてまいります。

第2は、知的発信をより積極的に行うことです。知的発信は本学の研究力を社会に示すとともに、研究成果をもって社会・地域に貢献することでもあります。知的発信の集積は、本学の大学力を形成することにもなります。より充実したインパクトのある知的発信を積極的に展開し、活力ある姿を示していきたいと考えます。

2008年11月には、向ヶ丘遊園駅前にサテライトキャンパスが完成します。また、文学部改編を通して、新学部を2009年度開設に向けて準備を進めています。

今後も、育友会、校友会をはじめオール専修の力を結集し、130年の歴史と伝統に恥じない活力ある大学への道を歩んでいきたいと願っています。



【Profile】1948年(昭和23年)宮崎県生まれ。70年(昭和45年)専修大学法学部卒業。75年(昭和50年)明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。84年(昭和59年)専修大学法学部教授。2004年(平成16年)法科大学院教授。同年学長(現在に至る)。2006年(平成18年)理事長就任(現在に至る)。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考査委員、法制審議会臨時委員などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』(慶応通信)、『刑法における錯誤論の新展開』(成文堂)、『違法性の基礎理論』(イウス出版)など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。

建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年(明治13年)、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによっても極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を21世紀ビジョンに据えました。社会知性の開発をどのように具現化するののかについては、各学部あるいは大学院の各研究科によって方法論も力点も自ずから異なりますが、各部署において積極的かつ真摯な取り組みがなされています。



相馬永胤
(そうま ながたね)



田尻稲次郎
(たじり いなじろう)

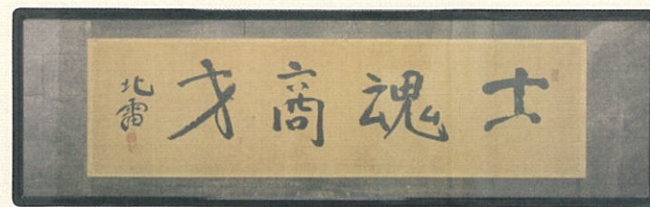


目賀田種太郎
(めがた たねたろう)



駒井重格
(こまい しげただ)

田尻稲次郎先生の書



創立者の一人、田尻稲次郎先生揮毫の書。

「北雷」という田尻先生の号がある。

「士魂商才」は、「和魂洋才」をもじって福澤諭吉がつくり、

渋沢栄一が多用して世の中に広まった言葉。

“この揮毫では「士魂」ではなく、「士魂」の文字が書かれている。

そこには田尻先生の思いが託されているように思える。

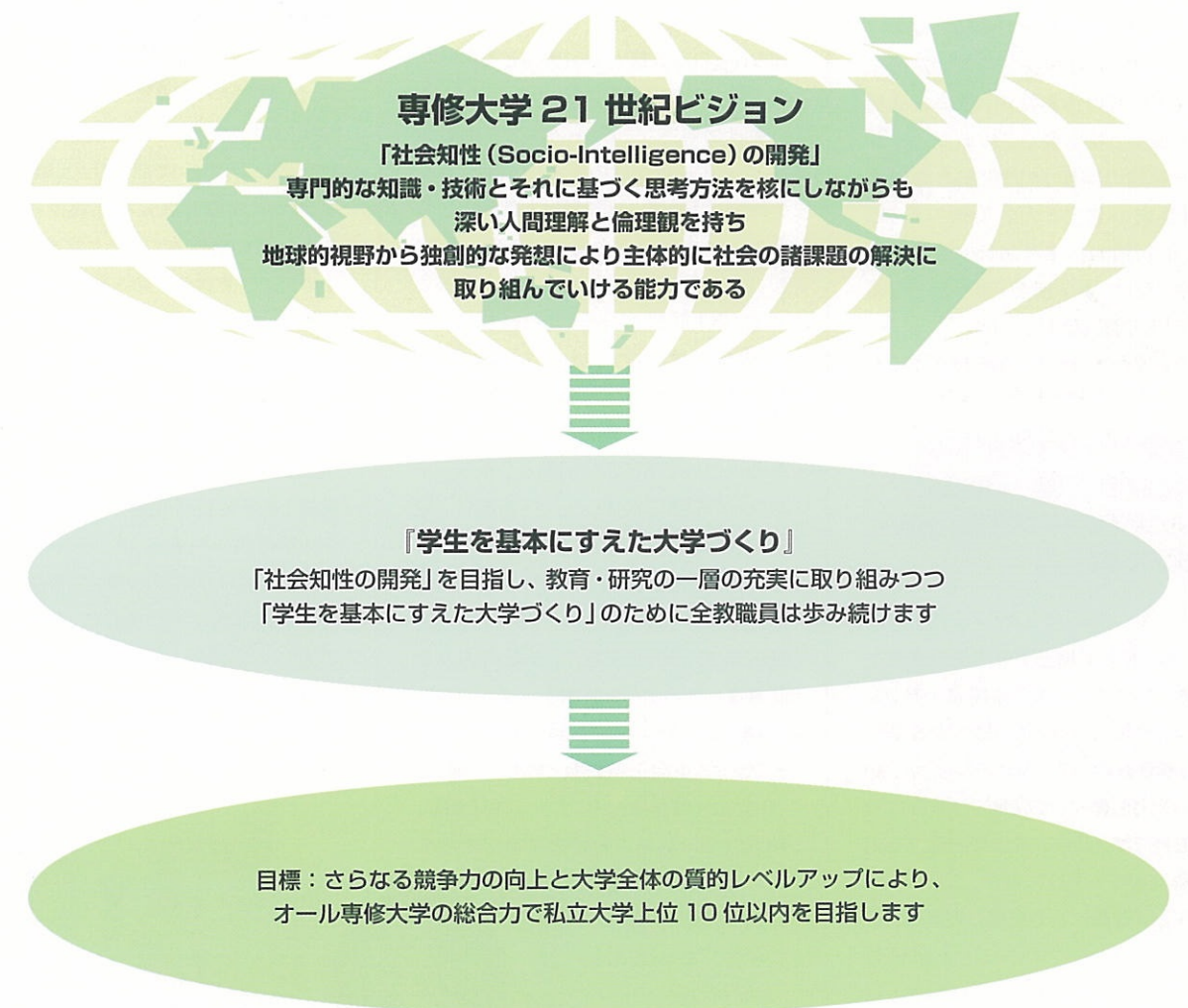
専修大学のサムライ・スピリッツは「鬼」ではないのである。”(学長 日高義博)

(写真：大学史資料課提供)

専修大学21世紀ビジョン

21世紀の今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題が山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」

だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。21世紀において本学は、「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」のビジョンのもと、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に諸施策を推し進め、社会知性開発大学としての道を歩んでいくのです。



創立 130 年記念事業

～ 2009 年 9 月、専修大学は創立 130 年を迎えます～

『蜂須賀家旧蔵本』特別展示と文化講演会 「専修大学からの知の発信」

本学図書館が所蔵する重要文化財・藤原為世筆『長秋詠藻』（1296 年写）をはじめ、伝吉田兼好筆『和歌題林抄』（鎌倉時代写）など 21 種、129 冊に及ぶ徳島藩主蜂須賀家旧蔵の古典籍が、徳島市立徳島城博物館で特別展示されました。これは同博物館の開館 15 周年記念特別展「蜂須賀家の名宝と大名美術の世界」（2007 年 7 月 20 日～ 8 月 26 日）のための借用依頼を受け、本学創立 130 年記念事業の一環として特別出品したものです。

蜂須賀家とは、阿波・淡路 25 万 7 千石

特別展「フランス革命下の民衆と自由・平等 — 専修大学『ベルンシュタイン文庫』が語るフランス革命 —

「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」とは、1977 年に本学が創立 100 年記念事業として購入した「フランス革命関連史料コレクション」であり、フランスの著名な書誌学者・古書籍商のベルンシュタイン氏が、40 数年の歳月を費やして収集した非常に貴重な史料です。現在、本学が所蔵する史料点数は 4 万 7 千点に及び、これはフランス国立図書館に次ぐ規模。史料は、革命当時のチラシやポスター、ルイ 16 世の遺言書、マリー・アントワネットに対する死刑判決書など多岐にわたるものです。

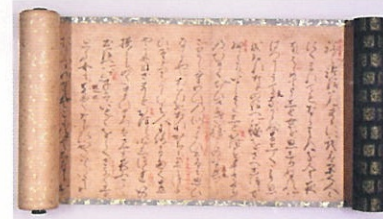
の大名で、豊臣秀吉とゆかりの深い一族です。『阿波国文庫』に代表されるように、文化に傾倒した藩主を代々輩出したと推測され、美術品の収集に注力したといわれます。その蜂須賀家旧蔵の『阿波国文庫』は明治維新以降に散逸し、全貌は窺い知れません。現在、主な所蔵先として知られるのは専修大学図書館と徳島県立図書館、国立国会図書館です。

展示期間中の 8 月 5 日には文化講演会（本学と徳島新聞社の両主催）がウエルシテイ徳島で開催。特別展示と講演会にちなんで、まず本学の大庭健図書館長が挨拶。「知の発信」をテーマにしたこの講演会では、第 1 部として日高理事長・学長による「大学改革と大学のあるべき姿—社会

2007 年 10 月、この史料をもとにフランス革命について考える特別展と公開シンポジウムが開催されました。特別展は、紀伊國屋書店新宿本店にある紀伊國屋画廊で開催（10 月 25 日～ 30 日）。本学図書館主催の特別展では、コレクションから代表的な 52 点が公開され、多数の人々が訪れました。また、公開シンポジウムは「ベルンシュタイン文庫が語るフランス革命—フランス革命下の民衆と自由・平等—」（社会知性開発研究センター主催）と題し、10 月 25 日に新宿の紀伊國屋書店南館サザンシアターで開催。民衆の行動や同革命の理念である「自由」「平等」の視点からフランス革命像を再検



長秋詠藻
藤原為世筆 永仁 4 年 (1296 年) 写
蜂須賀家伝来 専修大学図書館蔵 重要文化財



源氏物語（空蟬巻）
今川了俊筆 応永 17 年 (1410 年) 写
蜂須賀家伝来 専修大学図書館蔵

知性の開発を目指して」を講演し、本学の教育ビジョンについて語りました。第 2 部は、本学文学部の石黒吉次郎教授が「蜂須賀家旧蔵の貴重本（専修大学図書館蔵）をめぐって」を講演。第 3 部では、徳島城博物館学芸員の須藤茂樹氏による「蜂須賀家の美術品収集」の講演がありました。

討しようと、学内外の 3 人の専門家が講演しました。講演者とテーマは、山崎耕一教授（本学客員研究員・一橋大学）「フランス革命期の知識人」と、小井高志教授（立教大学）「リヨンのフランス革命—自由と平等の狭間で—」。そして、本学文学部の近江吉明教授（歴史学研究センター代表）は、「バス・ノルマンディーにおける 1789 年の食糧蜂起」を講演。講演に続いてのシンポジウムも盛況でした。



（右）手彩色の戯画
（左）マリー＝アントワネット
専修大学図書館蔵

学生を基本にすえた大学づくり

～ 地域から学び、地域へ発信する学部教育～

「しんゆり・芸術のまち」を PR タウンガイド「しんゆりキャンパス」

文学部の山田健太准教授のゼミナールが、川崎市麻生区の新百合ヶ丘を PR するタウンガイド「しんゆりキャンパス」制作に取り組みました。これは、キャリアデザインセンターが提供する「課題解決（地域密着）型インターンシップ」のひとつとして、本学と同じ小田急沿線にある新百合ヶ丘駅周辺の活性化を目的に組織された「しんゆり・芸術のまち」PR 委員会の活動に参画したものです。タウンガイドは 2007 年 12 月に完成。まずは、新百合ヶ丘のイルミネーションイベントでの街頭配布を行い、お披露目となりました。

制作に取り組んだのは 4 年次生（当時）の 14 名。「ばかり自身も実はこれまで、あまり新百合ヶ丘を利用していませんでした。もっと利用したくなる工夫ができないかを考え、学生の目線で作るタウンガイドによって新百合ヶ丘の魅力をアピールすることにしたのです。最初はイベントを企画する案もありましたが、それでは 1 日で終わってしまい、情報が浸透しませんから」と話してくれたのは、リーダーの松尾祐基さんです。

ページ毎に担当者を割りあて、1 軒の取材先に対して責任をもってアポイントメントから取材、撮影、原稿までを仕上げました。「学生のためのガイド」という方向性をぶれさせないために試行錯誤。取材を申し込んでも断られるケースがあり、妥協して方向転換も考えましたが、「学生が行きたくない内容にならないければ意味がない」

と、元の方針を守り抜きました。そのため、新百合ヶ丘にキャンパスのある昭和音楽大学と日本映画学校の学生の「オススメ SPOT」も紹介。「歩いている学生に声をかけ、アンケートしました」と佐野真理子さん。

3 年次のゼミで、テレビや新聞といった媒体について学んでいたことを実践できました。私たちが制作したものは地域が特定される紙媒体ですが、テレビ局や新聞社の取材を受けたことで、全国的に新百合ヶ丘を PR できましたしね」と大中敏実さん。山田准教授は、「3 年次から現場に出て行こうという主旨で活動しており、今回もその延長線。足を使って体験することで伝える力を身につけられたと思います」とゼミ生の成長を語ります。この『しんゆりキャンパス』は公共施設や小田急沿線各所に置かれ、大人気。新百合ヶ丘の PR を通して、「専修大生ここにあり」と堂々の宣伝もまたできたようです。



完成したタウンガイド「しんゆりキャンパス」

<http://www.senshu-u.ac.jp/empquali/careersupp/index.html>

徳田ゼミも 新百合ヶ丘の魅力を発信

地域経済について学ぶ経済学部・徳田ゼミ（徳田賢二教授）も、新百合ヶ丘のイルミネーションイベントで「写メコンテスト」を企画・開催しました。日本映画学校の協力を得て、約 1 分間の PR 映像も制作するなど、学生主体で多くのことにチャレンジできたようです。

ネットワーク情報学部は Web を活用した情報発信

2 つのコースが授業の一環でしんゆり PR に参加。コンテンツデザインコースの学生 97 人は、麻生区文化協会の活動紹介ホームページを制作。日ごろの学習成果をコンテンツに集約し、07 年 12 月には、麻生区役所で発表会も行われました。一方、情報戦略コースの学生 24 人は、「しんゆり・芸術のまち」に対する意識調査を実施。調査のための、Web を活用した企画設計と PHP ツールを使ったシステム構築に取り組みました。

キャリアデザインセンター 課題解決（地域密着）型 インターンシップ

キャリアデザインセンターが提供するインターンシッププログラム（課外）のひとつ。地域の企業や団体が解決しようとしている課題に、学生が一緒に取り組みます。川崎市との提携により実現した、新しいタイプのインターンシップです。

キャリアデザインセンター HP

社会知性を育む教育

「Stop Global Warming」地球温暖化対策プロジェクト ～意識改革への取り組み～

2007年度、地球温暖化へ警鐘を鳴らすべく、意識啓発に取り組んだプロジェクトがあります。ネットワーク情報学部3年次の必修科目「プロジェクト」で、綿貫理明教授が指導する「『Stop Global Warming (SGW)』地球温暖化対策プロジェクト」です。

社会や地域の課題をテーマとし、学部で学ぶ情報技術を用いて解決に導くことはできないか。「プロジェクト」ではこのような目的で研究が行われています。SGWプロジェクトでは「いま解決すべき最大の課題は環境問題に対する意識を共有すること」とテーマを設定し、「ユビキタス・センサー・ネットワーク」「地球温暖化に関する意識調査とその集計システム」等、4つのコンテンツを柱に据え、学生7人がそれぞれ担当をもって活動しました。「SGWは学

内だけではなく、社会と関わりながら地球温暖化の問題に直面することを目的とした産学官中高大連携の実践が特長です」と綿貫教授。ソフトウェア開発の(株)セントラルシステムズから技術アドバイスを受けた他、県や市の団体、中学・高校などの協力を得ました。2月2～3日には、ネットワーク情報学部学生有志主催のプロジェクト一般発表会「コウサ展」にも出展。3Dグラフィックスを担当した深井雄大さんは、「地球温暖化により、お台場の海面が上昇するとどうなるかを3Dで表現し、それを見た一人ひとりが温暖化防止に向けて行動できるよう作成しました」と説明。スクリーンには、お台場が海水に浸食されていく様子が映し出されます。

このプロジェクトは、07年12月「一村一品・知恵の環づくり in 神奈川」(神奈川県地球温暖化防止活動推進センター主催)において高い評価を得て、環境教育部門賞を受賞しています。



「コウサ展」で説明する深井さん(写真左上)。綿貫教授を囲みプロジェクトメンバー全員で。後列右端は(株)セントラルシステムズの大西社長。



授賞式の大倉直也さん

経済論文「高橋亀吉記念賞」 史上最年少受賞

「M&A時代の幕開け—日本企業は如何に行動すべきか—」。経済学部経済学科1年次生の大倉直也さん(現2年次)が佳作に入選となった論文のタイトルです。1984年から続く、第23回高橋亀吉記念賞(東洋経済新報社主催)において、最年少受賞者となりました。受賞作は、M & A成功のための3つのキーワードを掲げて持論を展開させたもの。審査員から「大学1年とは思えないほど高度な知識と論理性」と高く評価されました。

子どもの頃から流通業に興味をもち、会社を題材にしたゲームを考案して遊んでいたという大倉さんは、高校時代には『週刊東洋経済』を愛読するほど経済への関心を高めていたそうです。とはいえ、論文を書いたことはなく、入学式で配布された『知のツールボックス』を基に専門的なものの見方を勉強しました。経済学部の「新入生学術奨学生」採用試験では、課題の2000字のレポートも書き上げて見事採用。これで自信を深め、本人曰く「未知の領域」であった8000字の論文「高橋亀吉賞」に思いきって挑戦したそうです。

「ニュースであれこれ感じて、それは漠然とした考え。実際に書くことで、考えがまとまり、テーマに対する自分のスタンスも見え、知識を定着させられました」と文章を書く大切さに気付いた大倉さん。在学中に経済の基礎をしっかりと身に付けたいと向学心に燃えています。

文理の壁を超えて共同開発 携帯電話旅行ナビ「さあちず!」

文系の学生と理系の学生が、共同で何かを開発できたら。経営学部の渥美幸雄教授と、旧知の仲という公立はこだて未来大学の高橋修教授のそんな思いから、携帯電話のナビ機能を応用した旅行者支援アプリケーション「さあちず!」が両大学の学生たちによって開発されました。

渥美ゼミナールでは「モバイル情報通信システムとその応用」が研究テーマ。今回の未来大学との共同開発には、ゼミナールから7名(当時3年次生)が参加しました。活動開始は2007年の5月から。とはいえ、両大学の学生たちが顔を合わせたのは2回の合同合宿のみです。意見交換や打ち合わせはテレビ電話とメールがほとんどでした。ソフト開発は、理系の未来大学が担当。一方、ユーザーの視点や需要の有無といった部分は渥美ゼミの担当。市場調査やビジネスモデルの提案に力を入れました。「理系の学生とは発想法も思考回路も全く違う。コミュニケーションをと



後列左から山口さん、渥美教授、大和さん、大箸さん、藍さん、前列左から岡崎さん、河野さん、清島さん

り、情報を共有することの難しさと大切さを実感しました」と河野靖広さん。「本来ならば共同研究という機会のない理系大学とひとつのものを創造する不思議さと面白さを体感。仕事のあり方を体験できたと思います」と清島亜紀さん。完成したソフト「さあちず!」は、①白地図上の訪れた地にマーキングしていく「自分だけの地図」、②旅行の思い出をメモとして地図上に残せる「置手紙」、③旅行先の写真などを地図上に隠し発掘させる「宝探し」の3つの機能を搭載。利用者同士が情報を追加することでガイドブックがなくても旅行やショッピングができ、また、広告収入を得るビジネスモデルを考案しました。

共同開発には協力企業として携帯電話会社など6社が参画。そのため各企業でプレゼンテーションも。藍大和さんは「社長や重役の方々に前にしての発表。他ではできない貴重な体験でした」。大箸匠さんは「研究の余地がまだある。後輩たちに引き継いでもらい、さらに完成度をアップしてほしいですね」と語っています。

渥美教授は「企業に入れば、文系と理系が合同でチームを組むのは当たり前のこと。学生時代に体験できたことは大きな財産になるはずですよ」と、その成果に目を細めていました。



連続公開講座「まちに学び、まちを活かす!」

地域社会から学ぶ「マーケティング」 ～商学部 渡辺ゼミ・神原ゼミ～

商学部の2つのゼミナールが、地域社会との連携事業に取り組みました。

本学は、「多摩区・3大学連携協議会(専修・明治・日本女子)」に参加し、生田キャンパスの地元、川崎市多摩区で様々な活動を展開しています。そのひとつに、地域社会の課題の解決を図り、連携して実践的な活動を行う事業を、多摩区からの委託事業として実施するものがあります。

2007年度は本学商学研究所が中心となり、「都市型観光としての多摩タウンセールスの方向」をテーマに調査活動を行いました。この調査には、商学部の渡辺達朗教授と神原理教授の両ゼミナール学生が、教室で学んだ知識を実践すべく参加。各々のゼミナールで小グループに分かれ、多摩区民へのアンケート調査やインタビューに奔走し、得られた結果を基に両ゼミ合同の全体会議でディスカッションを重ねました。

また、10月から12月にかけて、学生たちが地域社会から学ぶと同時に、学び得た内容を地域に還元することを目的とした連続公開講座「まちに学び、まちを活かす!」を開催。講師には、住民有志の会や商店会、NPOの方を招き、一般の聴講者と共に多摩区の歴史やまちづくりへの思いに熱心に耳を傾けました。

連携事業のまとめとして、多摩区の観光マップを作成し、2007年度末の3月には報告書と共に多摩区長に手渡されました。

知の発信のための研究開発

「古代東アジア世界史と留学生」 井真成墓誌の謎を探る

東アジア世界史研究センター

2007年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に、社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センターの「古代東アジア世界史と留学生」が採択されました。

本プロジェクトは、本学大学院が発見に大きな役割を果たした「遣唐使・井真成墓誌」に関する中国西北大学大学院との共同研究を基礎に、秦・漢代から隋・唐代の中国に渡った東アジアからの留学生の全貌を明らかにしたうえで、古代の東アジア諸国への影響を解明するもの。また、東アジア世界の若手研究者の育成

を目的の一つとしています。プロジェクトでは、古代東アジア世界を流動した人々との対比を視野に入れたうえで、東アジアの国々が期待したさまざまな文化・文物の流入を直接担った留学生に焦点を絞り、テーマを設定している点が特徴です。こうした文化・文物を「移植」「媒介」した留学生たちの果たした歴史的な意義は、まだ十分に明らかにされていません。

2007年10月27、28日の2日間、「古代東アジア世界史と留学生」プロジェクトの初の公開講座とシンポジウムが、神田キャンパスで行われました。

公開講座のテーマは「井真成一日中の研究状況」。飯尾秀幸教授が司会を務め、日本側からは本学副学長で東アジア世界史研究センター代表の荒木敏夫教授が、



当時の日本、中国、朝鮮半島の情勢と日本書紀や宋書などに記されている留学生の様子を紹介。文学部長矢野建一教授は、「遣唐使・井真成墓誌」の解明について、これまでの研究成果と今後の課題を報告しました。中国側からは西北大学の王維坤教授が、同墓誌の発掘経緯や研究成果をはじめ、井真成の謎について自説を展開しました。

翌日のシンポジウムでは、金子修一・國學院大学教授、古瀬奈津子・お茶の水女子大学教授、加藤謙吉・成城大学兼任講師、石見清裕・早稲田大学教授、矢野教授が講演。荒木教授を加えた6人による討論が行われました。さらに会場からの質疑に応じ、活発なディスカッションが行われました。

法科大学院 (法務研究科法務専攻)

○2007年10月に設立された「法実務技能教育教材研究開発コンソーシアム」（通称：PSIMコンソーシアム）に、本学法科大学院が参加しました。

○文部科学省の2007年度専門職大学院等教育推進プログラムの「実務技能教育指導要綱作成プロジェクト」、「全国法曹キャリア支援プラットフォーム」の2件に共同取り組みとして参加し、採択されました。

社会知性の開発を担う 人材の輩出

舞台は「世界」…粘りの交渉で支援活動
—世界保健機関 (WHO)
南東アジア地域事務局官房室長医学博士
蒲 章則さん 1976 (昭和51) 年法学部卒業

WHO南東アジア地域事務局で地域事務局長のコーディネート役となり、インド、バングラデシュ、ミャンマー、ネパール、スリランカなど11カ国の保健衛生に関するあらゆる問題に対し政策的支援、技術協力、援助などを各国と連携しながら行っている。医療と行政の専門家の「国際公務員」として、グローバルな視点での「粘り強くあきらめない」交渉を得意とする。

国際法の池田文雄教授（現名誉教授）に言われた「働くなら世界を舞台に」という言葉が人生を決定づけた。

本学卒業後、四つの大学で国際法、医学、国際保健学などを学び、医学博士の学位を取得。(財)日本国際医療団などで国際医療協力の経験を積みながら履歴書を送り続け、37歳でWHOの職員に。

「日本は米国に次ぐ出資国ですが人的貢献が少ない。WHOで働く日本人は60人ほどです。さまざまな分野で経験を積み、専門性を身につけた人は、ぜひ国際公務員にチャレンジして」と後輩に呼びかける。

「専大の創立者は留学経験者ですから、後輩たちも、もっと海外に目を向けてほしい『興味があること』を探すためには、常にアンテナを張っていること。『将来が見えない』と悩んでいる人は、途上国を訪れてみて。『日本人のアイデンティティ』について深く考え、人生観が変わりますよ」とメッセージを残してくれた。(インド在住)

※『ニュース専修』より転載

第27回 横溝正史ミステリ大賞受賞

作家 桂 美人さん 1996 (平成8) 年商学部卒業

中学1年生から小説を書き始め、高校時代はファンタジーや歴史小説を書いていました。でも、大学時代は学生生活のすべてが新鮮で、小説からは離れていた時期でした。卒業後は転職や、司法試験に挑戦するなど自分の将来を模索する日々でしたが、そこで初めて「好きなことでなければ続かない」と気付いたのです。そこで、それまで書いた小説を見返してみるとどれも中途半端。「一度、きちんと書いてみよう」と、作品の応募に向けて本格的に取り組みしました。

受賞は自分でも意外でしたが、大学時代に培ったものが力になってくれたのだと思っています。大学進学を反対されていたため、自分で学費を捻出する必要がありました。1年次は新聞奨学生、2年次以降は様々なアルバイトを経験しました。時間はありませんでしたが、大学では厳しい勉強で有名なESS(英語研究会)にも所属し活動。勉強不足を厳しく指摘されましたが、忍耐力が身につきましたね。4年間続いたのは、仲間がサポートしてくれたから。ユニークな人ばかり集まり、後に児童文学作家やアナウンサーになった先輩などから多くの影響を受けました。

今は宗教をテーマに次回作に取り組んでいます。無難な道を選択してみても、最終的には本来求めている人生に戻っていくのだと実感。自分が向いていると思う方向へ歩むことが大切なのですね。



全日本学生囲碁十傑戦優勝

花巻 未生さん 経済学部経済学科3年次在学中

2007年11月の第44回全日本学生囲碁十傑戦(朝日新聞社、全日本学生囲碁連盟主催)、全国8地区の予選を勝ち抜いてきた強豪たちが争うこの大会で、経済学部の花巻未生さん(当時2年次生)が、見事初優勝を果たした。44回の十傑戦歴代優勝者に名を連ね、また初めて専修大学名を登場させたのである。

花巻さんは小1から囲碁を始め、中学からは住み込みで趙治勲十段に弟子入り。しかし、進路を考え始める高2までにプロ試験に合格できず、プロを断念。「囲碁から離れよう」と囲碁部のない本学に入学した。ところが翌年、囲碁で活躍する後輩が2人も入学。花巻さんを慕って「一緒にやりたい」という2人の思いに、「囲碁をする環境を整えてあげたい」と、愛好会を立ち上げた。

「先輩らしい成績を残したい」と、インターネットで世界中の愛好家を相手に囲碁を打ち、練習を再開。「以前より考える速度が遅くなった」という花巻さんだが、着実に勘を取り戻す。団体戦の大会では春に準優勝、秋には優勝。夏の個人戦では4位と健闘し、「そろそろ勝てる」と自信を持って、十傑戦という大舞台に臨んだ。優勝後は、愛好会を「部」に昇格させるためにも奔走。「今は、囲碁を通じて様々な世代とのコミュニケーションが楽しい。他大学とももっと交流したいですね。」と今後の飛躍が期待される。

今後の取り組み

創立 130 年記念事業の多方面での展開
新学部・新学科設置に向けて準備中
キャリア教育の充実(キャリアノート、キャリア支援科目の展開など)
学生支援体制の充実(『知のツールボックス』発行、留学の推進など)
高等学校との連携(高大連携)の促進
社会とのネットワークづくりの推進(千代田区、川崎市・多摩区など地域との連携他)
社会知性開発研究センターの活動拡大
向ヶ丘遊園駅前サテライトキャンパスの設置(平成 20 年度)
「SI 新書」の創刊

「Si-report」とは

「**Si**」とは……

「社会知性： **Socio-Intelligence**」の頭文字 [**S**] [**I**]
と

「**SENSHU Intelligence**」の頭文字 [**S**] [**I**]

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。

シンボルマーク&カラー



S の字は専修大学の「S」と 21 世紀ビジョン「社会知性 (Socio-Intelligence) の開発」の「S」であり、その S のブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。

マスコット

名前は
「センディ」です



体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるよう更にかわいくデフォルメしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは 2005 (平成 17) 年 9 月に制定されました。

専修大学 学長室企画課

(神田校舎) 〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8

(生田校舎) 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

Tel:044-911-1252 Fax:044-900-7803

<http://www.senshu-u.ac.jp/>